１　研究主題

外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図ろうとすることができる児童の育成
～基本表現と対話を続けるための表現を取り入れた活動の工夫を通して～

２　主題設定の理由

（１）社会の動向から

急速なグローバル化の進展という社会的背景から，異文化を背景にもった人との交流が一層増えていくことが予想される。このような時代を生きぬいていくためには，異文化を理解したり受容したりする資質・能力や，異なる価値観をもつ人々と関わり，積極的にコミュニケーションを図っていく態度が必要である。従って，今後，外国語（英語）教育の一層の充実が求められている。

今回の学習指導要領の改訂では，どの教科・領域においても，生きて働く「知識・技能」，未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」，学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」という主な３つの柱をもとに育成するべき資質・能力が求められている。「外国語活動」「外国語科」においても，上記に述べた３つの柱からなる資質・能力を育成することが求められているが，現行の「外国語活動」と同じく，「コミュニケーション能力の育成」が主たる目的であり，相手のことを考えながらコミュニケーションをする態度を育てることが重要である。よって，積極的にコミュニケーションを図ろうとすることができる児童の育成を追究していくことは，これからの小学校外国語教育に繋がっていくと考える。

（２）福岡市の外国語活動の現状から

福岡市においては，「アジアのリーダー都市ふくおか」をめざしている。今後，異文化を背景にもった人との交流が一層増えていくことが予想され，「アジアのリーダー都市ふくおか」の未来を担う児童がこのような時代を生きぬいていくためには，異文化を理解したり受容したりする資質・能力や異なる価値観をもつ人々と関わり，積極的にコミュニケーションを図っていく態度の育成が必要となってくる。

しかし，外国語活動の現状としては，児童が単元の新出言語材料に慣れ親しむことに重点が置かれていた一方で，複数単元を通じた系統性が弱く，言語材料の使用が単元ごとで完結し，「その場だけのコミュニケーション活動で終わっている」「他の場面や活動で児童が既習表現を使わない・使えない」という姿が多く見られる。福岡市も同様の状況が見られる。今後の外国語教育において，「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善をしていくために，言語材料の「意味」と「（当該言語材料が使われる）「場面」と（言語材料を使用する）「目的」を結びつける活動の工夫を研究し，児童が自分の思いや考えを伝えるために，その場に応じて必要な表現を取り出して使い，積極的にコミュニケーションを図ろうとすることができるようにしていくことは，これからの福岡市の外国語教育の充実を図るためにも必要であると考える。

（３）これまでの研究から

本研究委員会では，昨年度「外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図ろうとすることができる児童の育成」を目指し，副主題に「ＧＴの効果的活用を通して」を設定し，研究に取り組んでいった。その結果以下３点の成果があがった。

○　担任とＧＴの役割が分かる指導案を作成するという視点から

・　指導案上に担任の役割と GT の役割とが示されたことで，それぞれが担うべき授業の進行や具体的な活動の提示が明確になった。GT のすることが明確になったことで，より一層役割分担がしやすくなった。

○　ＧＴのもつ文化的背景を活かした教材の提示を行うという視点から。

・　GT のもつ文化背景に限らず，外国の文化を含めて児童に提示したことで，児童が自分たちの日常生活と外国の生活の違いに気付いたり，身近なものが外国ではちがう見方になるということに気付いたりするきっかけになった。このことから児童の活動への興味・関心を高めることに有効であった。

○　１単位時間の活動の中に児童とＧＴが関わることができるような活動を設定し，児童の伝えたいという気持ちを喚起するという視点から。

・　児童の個別の活動に GT が関わって称賛したり表現を教えたりすることは，コミュニケーションへの意欲の向上や，英語をより注意深く聞こうとする態度の育成に有効であった。

以上３点を成果としてあげるが，本年度の研究委員会では，これまでの成果を踏まえながら，基本表現と対話を続けるための表現を取り入れた活動の工夫に焦点をあてて研究を進めていくことにした。中学年における外国語活動，高学年における外国語活動の教科化に向けて，今一度，積極的なコミュニケーションを図ろうとする児童とはどのような姿なのかをしっかりと捉え直し，その姿が表れるように，必要な教材の準備や授業づくりを見直していくことは重要だと考える。

３　主題の意味

<u>外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図ろうとすることができる児童とは</u>

基本表現・既習表現（今までに慣れ親しんだ既習の語句や表現，ジェスチャー等を使って，

・　GTや先生，友達に，身近な事柄，自分のこと，自分の気持ちや考え・意図を伝えようと関わる姿

・　互いの気持ちや考えを伝え合おうと対話を続ける姿

以上２点の姿である。高学年での目指す姿は以下の姿である。

目ざす姿 高学年 ・基本表現や慣れ親しんだ既習の語句や表現・ジェスチャー等を用いて，GTや先生，友達に自分の気持ちや考えを伝えようとしたり，相手の気持ちや考えに反応しながら聞こうとしたりして，より豊かに対話をしようとする児童

４　副主題の意味

基本表現とは

基本表現とは，単元で慣れ親しんでいく主な語句や表現のことである。

対話を続けるための表現とは

対話を続けるために必要な既習の語句・表現のことである。コミュニケーションを円滑にするために，身振りや表情，ジェスチャーなどの非言語的表現も含める。

基本表現と対話を続けるための表現を取り入れた活動とは

基本表現と対話を続けるための表現を取り入れた活動とは，慣れ親しんでいく基本表現と既習表現を併せて使っていく活動のことである。なお，活動の際には，以下の使用場面や言語の働きの表現例を使用する。

（※新学習指導要領「外国語活動・外国語科」より抜粋）

言語の使用場面→①児童の身近な暮らしにかかわる場面
（家庭での生活・学校での学習や活動・地域の行事）
②特有の表現がよく使われる場面
（挨拶・自己紹介・買い物・食事・道案内・旅行など）

言語の働き　→①コミュニケーションを円滑にする
（挨拶をする・呼び掛ける・相づちを打つ・聞き直す・繰り返すなど）
②気持ちを伝える
（礼を言う　・褒める　・謝る　など）
③事実・情報を伝える
（説明する・報告する・発表するなど）
④考えや意図を伝える
（申し出る・意見を言う・賛成する・承諾する・断るなど）
⑤相手の行動を促す
（質問する・依頼する・命令するなど）

活動の工夫とは

基本表現と対話を続けるための表現を取り入れた活動にするために，以下の２点を「活動の工夫」として取り組む。

○基本表現と対話を続けるための表現を使ったデモンストレーションの設定
①活動前のデモンストレーション（活動の説明）
②中間評価でのデモンストレーション

○基本表現と対話を続けるための表現の提示と活用

５　研究の目標

既習表現と対話を続けるための表現を取り入れた活動の工夫を通して，外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図ろうとすることができる児童の育成を目指す。

６　研究の仮説

外国語活動の授業づくりにおいて，以下の２点を中心に既習表現と対話を続けるための表現を取り入れた活動の工夫を行えば，外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図ろうとすることができる児童を育成できるであろう。

〇基本表現と対話を続けるための表現を使ったデモンストレーションの設定

〇基本表現と対話を続けるための表現の提示と活用

７　研究内容と方法

（１）基本表現と対話を続けるための表現を使ったデモンストレーションの設定

「基本表現や既習表現（今までに慣れ親しんだ語句や表現）を使えば，自分の思いや考えを伝えられる」と，活動の見通しをもって，外国語を用いた積極的なコミュニケーションができるように，以下の２つをデモンストレーションとして取り入れる

①　活動の前のデモンストレーションの設定

活動の見通しをもつことができるように，活動の前には，担任とＧＴが基本表現だけでなく，対話を続けるための表現（今までに慣れ親しんだ語句・表現・身振り・ジェスチャーなどの非言語的表現）を取り入れたデモンストレーションを設定する。その際，上記の副主題の意味に記した使用場面や言語の働きの表現を大切にしたデモンストレーションを行っていく。

②　中間評価でのデモンストレーションの設定

続きの活動（後半）の活動の見通しや意欲をもつことができるように，中間評価では，担任と GT によるデモンストレーションによって，お手本となる児童の姿を紹介したり，もっと慣れ親しんでほしい表現を紹介したりする。その際には，なぜ，その表現を使うといいのか，表現の良さについて考えられるようにしていく。

（２）基本表現と対話を続けるための表現の提示と活用

児童が自らコミュニケーションの中で，基本表現や対話を続けるための表現を選んだり，思い出して使えたりするために，基本表現や対話を続けるための表現を提示する。単元のゴールを知る活動や慣れ親しみ活動，コミュニケーション活動の中で，随時，担任や GT が掲示物を指し示したり使っている表現を掲示物で紹介したりする。

※　指導案の中の活動の詳細には，基本表現と対話を続けるための表現を使ったデモンストレーションの内容を掲載している。

また，外国語活動の授業を行う際には，以下のことを前提として，授業づくりを行うものとする。

◎外国語活動を行う上での前提（これまでの研究の成果を踏まえて）

- 指導案の作成を行い，ＧＴとの打ち合わせを行う
- 単元のゴール像の明確化
- 単元を構成する１単位時間あたりの目標の明確化
- １単位時間を構成する活動の目的の明確化
- 児童の発達段階や興味関心にそった活動の設定
- 聞くことから話すことへの無理のない活動の設定
- 必然性のある活動の設定
- 待ち時間の短縮化や，たくさんの人と関われるようなルールの工夫
- 児童が積極的に外国語を用いて活動することができたかをふり返ることができるようにするために，ふり返りカード（自己評価）では，「慣れ親しんだ」等の表現にする。

８　研究構想図

外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図ろうとすることができる児童の育成

段階・活動		手立て
【伝え合う段階】 ・　基本表現と対話を続けるための表現を使って，身近なこと・自分のことについて伝え合う	・　基本表現と対話を続けるための表現を使って，身近なこと・自分のこと伝えたり相手を知ろうとしたりする対話を続ける姿 ・　活動をふり返って，英語を使ってできるようになったことをふり返ることができる姿	**【基本表現と対話を続けるための表現を取り入れた活動の工夫】** **（太字が本年度の重点）** ・　英語を使えたかどうかをふり返る場の設定 ・　**基本表現と対話を続けるための表現を取り入れたデモンストレーションの設定**
【関わる段階】 ・　基本表現と対話を続けるための表現に慣れ親しむ活動	・　基本表現と対話を続けるための表現に慣れ親しむ姿 ・　今までに慣れ親しんだ表現も使えば活動ができそうだとこれからの活動に見通しをもつ姿	・　**基本表現と対話を続けるための表現の提示と活用**
【出会う段階】 ・　学習内容に興味をもち，単元のゴール像を知る活動	・　「楽しそうだ」「やってみたい」「今までに慣れ親しんだ表現を使ってできそうだ」「もっと知りたい」「伝えてみたい」など，これからの活動に興味関心をもつ姿	・　基本表現と対話を続けるための表現を使ってコミュニケーションを図ろうとすることができるゴールの姿の明確化

※１単元におけるこの学習過程を，年間通して繰り返して行っていく。

・もっと英語を使いたい。
・英語を使って自分のこと・考えや思いを表現したい
・相手のことを知りたい。

でも

【児童の実態】
・英語で話すことに自信がない。・今までに慣れ親しんだ表現を使うことが少ない。
・特定の児童と関わりたがる。

９　研究の実際

※研究要録の５年生実践，６年生の実践に記載

10　成果と課題

本年度は，「外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図ろうとすることができる児童」の育成をめざして実践に取り組んできた。今年度の研究の成果と課題は以下の通りである。

（１）基本表現と対話を続けるための表現を使ったデモンストレーションの設定

〇成果

・　担任とGTによる基本表現と対話を続けるための表現を使ったデモンストレーションを見せたことで，児童が本時活動で，どのようなやり取りをすればいいのか見通しをもつことができたりどのような表現を使うのかが分かったり，活動への意欲をもつことができたりと，基本表現や対話を続ける表現を使って積極的にコミュニケーションを行うことができていた。

●課題

・　デモンストレーションをすることで，活動の見通しをもつことができたが，「なぜ，対話を続けるための表現を使うのか」，【対話を続けるための表現を使う良さ】までを児童に伝えきれていなかった。コミュニケーション活動のみならず，単元のゴールの姿を見せたり，慣れ親しむ活動でのデモンストレーションの中でも意識して使ったりしていき，「なぜこの表現を使ったのか」，「使うことで，何が分かるのか。」など，児童に使う良さを考えさせることで，主体的に外国語を使うようになる児童の育成を図りたい。

（２）基本表現と対話を続けるための表現の提示と活用

〇成果

・　基本表現や対話を続けるための表現を提示することによって，児童が何をどう言えばいいのか分からない時に，掲示物を見ながら，相手とコミュニケーションをする姿が見られた。このことから，デモンストレーションだけでなく，どの場面で使えるのか絵と表現をセットで掲示することによって，外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図ろうとすることができる児童の育成にとっては有効である。

●課題

・　活動場所のいたる所に掲示していたため，絵と表現がセットになっているが，どの場面で使えるのか，分からない・活用できない児童もいた。ただの飾りとならないようにするために，掲示物を縮小した分を用意し，誰もが目の前で掲示物を見るなど，掲示物をどう活用するとよいのかについて考える必要がある。

（３）その他

・　児童にどのような表現を使ってほしいのか，指導案作成時には，ゴールの姿や慣れ親しみの活動で目指す姿をしっかりと考えることで，教師が，対話を続けるための表現を意識して活動に取り入れていくことができるようになった。このことで，今後の外国語教育でも，基本表現だけでなく対話を続けるための表現にも着目した活動を仕組むなど，活動の工夫が期待できる。

11　研究組織図

研究委員長　長門　直子　石丸小学校　校長

研究副委員長 香川　雅博　堤ケ丘小学校 校長

事務局長　藤野博司
事務局　竹杉由紀子
大塚祐子

研究部長　甲斐絵美
研究副部長　木下　薫
研究推進委員　八和田　広子
野田　清生

６年Ａグループ	５年Ｂグループ
木下　薫　（城原小６年）	甲斐絵美　（弥生小５年）
八和田　広子（片江小３年）	野田清生　（飯倉中央５年）
藤野　博司　（長尾小６年）	竹杉由紀子（弥永小５年）
寺尾　大地　（那珂小６年）	大塚祐子　（八田小５年）
安田　愛　（小笹小３年）	立花奈巳　（玉川小５年）
香月　佑子　（鶴田小２年）	永野亜理佐（松島小４年）
鮎川　海帆（草ヶ江小１年）	梶原誉史　（月隈小４年）
梅野　夏　（周船寺小６年）	石川晃太朗（香陵小５年）
	福永　麻衣（愛宕浜小５年）